

学童と共に集団疎開

田川郡香春町

伊藤 初子

昭和19年の春、私は大阪の師範学校を出たばかりの新米教師で、敗戦が近いとは夢にも思わず西宮の自宅から兵庫県に近い西淀川区の国民学校で6年生を担当し、教育に情熱を燃やしていた。

夏休みが終わると学童疎開の議題が職員会議で出され、討議することや意見を言う事もできず、上からの指令通り決定し、徳島県撫養にある天理教会へ行くことになった。学級50人位の学童の中で、親せきが地方にあたり、身体虚弱で集団生活の無理なものを除き半数位となり、9月末頃だったと思うが出発するようになった。引率者は40才をすぎた男性教師と私のような若い独身女教師で編成された。

私は子ども達の命をあずかる重大な任務には思い及ばず、『ただ一晩中空襲警報なしにぐっすり眠りたい、おなか一ぱい食べたい』という一心で、まるで旅行にでも行くように嬉々として大きなリュックに身の回りの物をつめ、防空頭布を肩に張り切って出発した。子ども達もまるで修学旅行気分、大阪駅では汽車の窓より手を振り両親に別れを告げたが、親の方は皆涙ぐんで、さぞかし頼りないと思っただろうが、この新米教師の私にまで「先生、お願いします」と心をこめて頼まれた。

宇野より連絡船で高松へ渡り、幸い空襲にもあわず撫養に着き、「天理教会前」で電車を下り、大きな教会へたどり着き、その日から子ども達と教師の疎開生活が始まった。

毎朝、地元の学校へ男子教師が引率し、私は残って寮母さんと洗濯、掃除をし、元気よく「ただいま」と帰って来る子ども達を涙ぐんで迎えた。夜の学習時間は個別指導をし、終わると両親兄弟に手紙を書き、まとめて郵送した。返事が来ると手紙の束を持った私のまわりに集まり、返事の手紙を渡したが、来なかった子どもののがっかりした顔を見るのが辛かった。

子ども達はだんだん元気がなくなり、話す事も少なくなった。夜は布団をかぶって声をこらして泣いているのがわかり、その不憫さに私は胸が一杯になり何度も涙をぬぐった。

一ヶ月程たつとやっとなれたか元気になってきたが、私たちは髪の毛や肌着についた「シラミ」退治が仕事となった。髪はすき櫛ですいてたまごを取り除き、肌着は子どもが登校後、縫目に「シラミ」のたまごのびっしりついたものを風呂釜に入れ煮沸してから干す。これをくりかえした。食糧は大阪よりはましな物を食べることができたが、何よりも公平に分配するのが大変だった。並んだ食器の中を見て、少しでも多く見える所へ競って坐った。おやつの豆粒まで数えて与えた。飽食時代の現在からは思いもつかない有様だった。

やがて昭和20年のお正月を迎えた。冬休みの間はずっと一日中子ども達に囲まれ、トランプ、百人一首などをし、外ではかくれんぼ、縄とびと私の方がくたくたになった。

3学期が始まって間もなく、配置転換のため大阪に帰るよう校長より私に知らせがあり、荷

物をまとめた。子ども達は泣いてとりすがり、私も身をさかれるような思いがした。出発の時、ホームに並んで泣きながら送ってくれたこの子たちにもう会えないかも知れないと思うと、私も涙でくしゃくしゃの顔を窓から出して一心に手を振った。電車が走り出すと一緒に走り出し、ホームがなくなると何人か田んぼにころげこんだ子ども達を見ながら、しばらく声をこぼして泣いた。

帰って学校に行ってみると、私達が運動場に苦勞してつくった畠に焼夷弾が落ち、大きな穴があいていたのにびっくりした。『疎開させていなかったら』と思うと背すじが寒くなった。

疎開していた子どもは6年生だけ3月に帰り、中学校、女学校へ進学する者、高等科に残る者と、卒業式もしないままちりぢりになってしまった。

その後ずっと思い出し気になっていたが、機会もなく、何年か前クラス会のため上阪した際、学校のあったあたりに行ってみたが、あとかたもなくなり商店街になっていた。家庭訪問で行った道を思い出し、迷いながら探して一軒見つけ、幸いにも会うことができ、今ではよいお母さんになったあの時の教え子と抱き合っ泣いた。

それ以来、便りを交換しお互いの無事確かめあっている。その他の子ども達はどのようにしているだろうか、あの疎開生活はどのように心に残っているだろうか。もう還暦をすぎ平和な家庭を営んでいることだろう。

恋も結婚も考えず、ただひたすら教育に熱中していた純情な50年前の私の姿と、あの寝食を共にした苦難時代の子ども達の姿がだぶって脳裡に浮かび、なつかしい思い出となっている。

私は終戦10日前、8月5日に自宅が爆撃で焼失し、九州で農家を営んでいた伯母の家で両親、妹と共に終戦を迎えた。

もう二度と教壇に立つ資格はないと退職届を大阪に郵送し、生きる目標を失い、ぼんやり日々を過ごしていたが、この地で復職し、結婚して3人の子育てを終わり、37年間の職を退いた今、夫婦共健康にめぐまれるという最高の幸せな日々を送っている。

終戦50周年を語る場合、私の中の戦争は終わっているのか、あの疎開生活を送ってまでがんなった戦争は何だったのかという事を掘り返して考えていくことによって、私の戦後があると言えるのではないだろうか。

このような戦争体験を戦後生まれの体験のない人たちに伝えながら共通点を見つける手がかりとして語り続け、二度とあのような戦争体験を子や孫たちに絶対味わせてはならないと、50周年という節目の年を迎え、心から願っている毎日である。